

あした元気になる!～半分のさつまいも～

2005(平成17)年6月10日鑑賞(東映試写室)

★★★★



総監督・脚本＝中田新一／監督・脚本＝竹内啓雄／作画監督・キャラクターデザイン＝湖川友謙／総指揮＝綾部昌徳／原作＝海老名香葉子『半分のさつまいも』くもん出版／声の出演＝吉永小百合（語り）／上戸彩／うえだゆうじ／山口勝平／森川智之（「あした元気になる～れ！」全国配給委員会配給／2005年日本映画／90分）

……アニメ嫌い(?)の私も戦後60年の今年、「これだけは!」と思って観に行ったもの。1980年に亡くなった林家三平師匠の奥さんである海老名香葉子さんの体験にもとづく原作が基本。1945年3月10日の東京大空襲、そして8月15日の終戦を背負って生きる戦争孤児となった子供たちの姿は、単純な物語ながらやはり考えさせられるもの。小学校5年生だった主人公やその少し年上のお兄さんと同じ世代の今どきの少年少女たちは、この映画を観てどのように受け止めるのだろうか? 単純な親子・兄弟の愛情や支え合いの気持がすべて基本! こんな気持を感じとることはできれば、今どきのややこしい少年犯罪も無くなるはずだと思うのだが……?

主人公は小学校5年生!

大阪大空襲は1945年3月13～14日だが、1回目の東京大空襲は1945年3月10日。これによって東京の市街地の4割が焼け野原になり、焼失家屋は約30万戸、死者は8万人以上にのぼったとのこと。沼津の静江おばさんの家に「縁故疎開」をしていた小学校5年生の主人公かよ子は、遠く沼津の家からこの大空襲を心配していたが、数日後沼津にやって来た兄の喜三郎は、東京大空襲によって父親・母親・祖母そして兄たちの家族6人が死亡したという衝撃的な事実を告げた。そしてまもなく1945年8月15日の敗戦。この時、兄弟2人だけになった主人公かよ子は小学校6年生。さて、戦争孤児となった2人は、これからどのように生きていくのだろうか?

終戦直後の東京の焼け野原を考える……！

主人公のかよ子は原作者である海老名香葉子そのもの。海老名香葉子は1933年生まれだから私より16歳年上。この映画の最初と最後の「語り」をしている吉永小百合は、ピッタリ終戦の年と重なる1945年生まれであることはよく知られている。今どきの若者が終戦の年の焼け野原となった東京の姿やその時代をどのようにイメージしているのかは全くわからないが、私には小説や映画等によって頭の中にこびりついている明確なイメージが3つある。

第1は田村泰次郎の小説『肉体の門』と再三映画化されたその映画。多分、中学校1年生の時に隠れて読んだ旧仮名遣いによるボロボロの本は、思春期の男の子にとって何とも刺激的なもの。したがって映画も大興奮(?)しながら観た記憶が……。

第2は今でもカラオケで「年配者バージョン」になるとよく歌う、『東京の花売り娘』や『星の流れに』など、「あの時代」を歌った数々のナツメロの名曲。なぜか私は、この手の曲もすべて知っているのだ！

第3は『りんごの歌』や『異国の丘』に代表される、誰もが知っている終戦直後の国民的大ヒット曲。中でも劇団四季のミュージカル『異国の丘』で印象的に使われた『異国の丘』の曲は、あの舞台で聴くと感動的で、何度も涙を流したものだ。

今年56歳となった私にとっての終戦直後の焼け野原となった東京のイメージはこんなものだが、果たして私より少し先輩の吉永小百合はどんなイメージを？そして林明日香が歌う曲『蓮花』を作曲した、同じく私より少し先輩の谷村新司はどんなイメージを……？

「買出し」と「闇市」

焼け野原となった終戦直後の日本を襲ったのは食料危機。お米や麦、芋そして野菜を作っている農村部はまだまじだったが、都心部ではとにかく食べるものが何もない！そこで必要不可欠となったのが「買出し」と「闇市」。買出しは合法的なものだが、闇市はもちろん違法。この当時、配給米という制度があったが、それを杓子定規に守っていたのでは飢え死にしてしまうということはむしろ常識

……。そんな中、食糧管理法は悪法だが、自らその法律を破るわけにはいかないと言って、ヤミ米に手を出すことを断固として拒否し、その結果栄養失調で死亡した山口良忠判事のお話は有名だが、果たしてそれが正しい生き方かどうかは、賛否両論の分かれるところ……。この、戦後のどさくさの中で必然的に生まれた闇市は、さまざまな人間模様を生み出し、縄張りが形成されヤクザ社会が形成されていくことに……。

たくましく生きる戦災孤児たちが……

かよ子の兄喜三郎は、戦後しばらくは東京中野の菊重おばさんの家で世話になっていたが、かよ子がここを訪れる数日前にケンカして飛び出してしまっていた。そんな喜三郎が生きる道は、同じ戦災孤児たちとともにグループを組んで、助け合いながら浅草の闇市の中で生きること。これを応援したのが兄貴分の島本達吉であり、逆にこれを排除しようとしたのが闇市の組合組織だった。

この映画は、下町浅草の闇市の中で自由に商売をすることを求めて生きる戦災孤児たちと、縄張りを確保することによって既得権益を守ろうとする組合との対立を描き、たくましく生き抜いていく少年たちの姿が浮き彫りになっていく。そして、これがちょっとした感動ドラマとなっている。しかし現実的にみれば、これはちょっとキレイゴトすぎるのでは……。だって、何の力もない戦災孤児たちがいくら団結したって、ここまで筋を貫き通すことなど、そりゃ所詮ムリな話では……？

かよ子の父親の財産処理は？

かよ子や喜三郎たちの家族の家は、昔の住所でいえば、東京の下町、本所区立川にあり、父親は釣り竿作りの職人で、「竿忠」を経営していた。瓦礫の山となってしまった竿忠の跡地を再三訪れたかよ子は、兄喜三郎がここを継ぎ自分がそれを手伝えることを夢見ていたが、それは夢のまた夢の話……。孤児となったかよ子や喜三郎を親戚だというだけの理由で面倒を見てくれていた菊重おばさんの行動が、決して好意だけにもとづくものでないことは映画を観ているとよくわかる。そして、それも仕方のないことだと思いながら観ていたが、実は……？

第1に、この菊重おばさんが「買出し」のネタとしてかよ子に渡したのは、かよ子の母親の大切な着物……。第2に、家族3人そろって外出しようとする時、菊重おばさんが着ていた着物も、母親が大切にしていたもの。そして第3に、漏れ聞いた菊重おばさん夫婦の言葉によると、竿忠の跡地の権利証を預かっていた菊重おばさん夫婦は、勝手にこれを売ろうとしていることが明らかに……。こりゃ、かよ子や喜三郎の父親の遺産の横取り（横領）ではないか！

この映画のストーリーは、どこまでがホントの話でどこまでが創作かはわからないが、海老名香葉子の体験にもとづく原作であることは明らか。そこで、現実はこの竿忠の跡地の相続や売買がどのように処理されたのかは知らないが、弁護士の私としては非常に気になるところ。もちろん、それはこの映画の本筋でないが、菊重おばさんがいい人なのか、それとも悪い人なのかを見極めることは、「あの時代」のさまざまな人間の生き方を考える上で、大切な本筋の話では……？

かよ子と復員兵との会話、そして半分のさつまいものメッセージ……

今や、多くの戦災孤児たちのボス(?)として闇市を取りしきっている喜三郎は、かよ子と一緒に生活することを拒否。また、売られようとしている竿忠の跡地を守る術など、かよ子にあるはずもない。そんな状況の中、いつも明るく前向きなかよ子もさすがに絶望状態になり、雪の中、1人竿忠の跡地で、このまま凍え死にするのかナアと1人考えながら座り込んでいた……。そこに通りかかったのが1人の復員兵。この2人の間で交わされる会話はちょっと感動的！ 人間同士の心の通った会話には、大人も子供も関係ないものだ痛感することまちがいなし！ そして、この感動的な会話を盛りあげる重要な小道具(?)が1個のさつまいも。復員兵が、身体の冷えきったかよ子に渡したさつまいもは、すごく温かいものだった。そして、「半分のさつまいも」がもつメッセージを、贅沢な食料品にあふれた中で生活している今どきの若者たちは、どのように受けとめるのだろうか……？

ヒットしてほしい林明日香の曲

『四日間の奇蹟』(05年)で平原綾香が歌った『Eternally』は期待していた曲だ

ったが、少し難しすぎて、私が歌うには少ししんどい曲。しかし、この『あした元気にな～れ！～半分のさつまいも～』で林明日香が歌う『蓮花』はピアノ伴奏のみのシンプルな構成の曲で、1度聴いたら大体覚えられるもの。したがって歌詞カードを持って3～4回聴いて練習すればバッチリのはず！

林明日香は2003年に『ake - kaze』でデビューし、3rdシングル『小さきもの』でその歌の上手さが絶賛され、活躍が期待されながら、あまりヒット曲には恵まれてない……？ 映画の主題歌が大ヒットするケースは少ないものの、この『蓮花』はわかりやすく歌いやすい歌だから、若者層を中心にヒットしてもらいたいもの……。私も早速CDを買って、自分の持ち歌にしておこう……。

2005(平成17)年6月11日記

あの戦争、あの日 この映画で

この夏『あした元気にな～れ！～半分のさつまいも～』がハリウッドの超大作『スターウォーズ エピソード3』や『宇宙戦争』の向こうを張って(?)、第七藝術劇場などで小さく(?)公開される。

これは1945年3月10日の東京大空襲で父母・祖母と兄弟2人を失った海老名香葉子氏の体験にもとづく原作をアニメ化した「戦後60年記念作品映画」。疎開先で父母たちを案じていた小学5年生のかよ子は、たった1人生き残った兄喜三郎から悲惨な現実を知らされることに……。

超高層ビルが林立する現在の東京都心の姿からは到底想像できないが、敗戦直後の東京は一面の焼け野原。幼い兄妹が生きていく道はそりゃ厳しいものだったが、喜三郎は持ち前の度

胸と行動力で闇市を仕切り、戦争孤児たちの期待を一身に背負っていた。

1949年生まれの私が個人的にイメージできる「あの時代」の代表は、時々カラオケで歌う『東京の花売り



娘』と日活などで再三映画化された田村泰次郎原作の『肉体の門』だが、一般的には『りんごの歌』か……？

また、劇団四季の昭和三部作の1つであるミュージカル『異国の丘』では、あの吉田正が作曲した名曲『異国の丘』の誕生秘話が感動の涙とともに……。

今年4月中国で吹き荒れた反日デモの影響は予想以上に大きく、「抗日戦争勝利60周年」を祝う記念行事が相次ぐ今年中国への夏のツアー客は半減したとのこと。これが一時的な現象であることを願いつつ、日本人は日本人なりに、今年の夏は靖国参拝問題のみならずこんな映画を観て「あの戦争」と「あの日」を真剣に考え、議論したいものだ。

この映画のもう1つの注目は、今年3月以降、上海音楽院の教授として活躍中の谷村新司作曲の主題歌『蓮花』。林明日香が歌うピアノ伴奏だけの美しいバラード曲は一度聴けばすぐに覚えられる名曲。私は既にカラオケの持ち歌としたが、夏真っ盛りの今あなたもこの歌から何かを感じとって欲しいものだ。

(弁護士 坂和章平)

映画

産経新聞 平成17(2005)年7月22日